

平成29年3月20日(月)

老球の細道314号

## トランスジェンダーとスポーツ

会津バスケットボール協会 室井 富仁

何かと発言が注目される米トランプ政権だが、移民対策だけではなく、性の多様性を認めない通達を出したことでも批判を高めている。心と体の性別が一致しないトランスジェンダーの生徒らを保護するオバマ政権時代の通達を撤回した。オバマ前政権は本人が望むトイレや更衣室の使用を認めなければ差別になるとし、公立学校に「心の性に応じて使えるようにすべきだ」と通達を出していたが、トランプ政権が先月取り消したという。

トランスジェンダーへの対応では日本の教育の現場でも話題になりつつある。昨年の日教組全国研修会においては、トランスジェンダーの子どもに対する指導や周囲の偏見、差別などに対する問題が取り上げられた。また、学習指導要領の改訂においても小中学校の保健体育における「異性への関心」領域に性的少数者の記載を求める訴えなどがある。

トランスジェンダーとは、生まれた性別とは異なる自己認識を持ち、身体とは異なる性別を生きようとする人々のことをいう。日本では「性同一障害」などと呼ばれていたが、今は疾患名ではなく、あくまでも生き方の一つの在り方だと幅広くとらえられる言葉となっている。アメリカでは「性別違和」と呼ばれ、身体と異なる性別を生きることは、個性であり、在り方の一つであるという考え方が市民権を得ている。

このトランスジェンダーの問題はスポーツの世界でも注目されるようになってきた。昨年のリオデジャネイロ五輪ではトランスジェンダーの参加者数が過去最高であった。I O Cの性的少数者の権利保護によるところであるが、トランスジェンダー・アスリートのハードルはまだまだ高い。競技に参加する際は「身体の性別(生まれた性別)で参加したい」と思っているのか、「心の性別にしたがって出場したい」と思っているのか。問題は競技の公平性である。競艇以外ほとんどの競技が男女別だからである。特に身体の性別が男である選手が心の性別女子で参加する場合に不公平の問題が出てくるだろう。

I O Cのルール(リオデジャネイロ五輪)ではトランスジェンダーの参加規程については次のように決められている。

- ①性別適合手術を受けていなくても出場可能。
- ②女性が男性に移行した場合は無条件でOK。男性が女性に移行した場合は、

\*女性としてのアイデンティティを継続的に4年以上持つ。

\*試合の1年以上前の時点から男性ホルモン量が基準値を下回っている。

日本では2010年からアスリートの性別変更を4競技団体が認めている。バスケットボールではまだそのような話は聞いたことがないが、今後十分に起こりえることだろう。

スポーツの現場では、コーチやチームメイトが適切に対処するために、まずはトランスジェンダーを特別だと思わないこと。競技中は生まれた性で活動するが、競技以外では心の性で生活することを理解してやる。例えば、個別のロッカーの準備、着替えの配慮、遠征などでは入浴時間をずらしたりすることなどが考えられる。

現代スポーツは万人に平等であり、限りない民主主義の下に成り立っている。身分や国籍、性別などを問わず、その身体能力だけによって極めて平等に扱われる文化である。トランスジェンダー・アスリートへの柔軟な対応が各競技団体やコーチに求められている。